

久慈 利武（教養学部人間科学科）

社会学の演繹的理論を求めて



略 歴

- 1964年 青森県立青森高等学校卒業
- 1968年 東北大学文学部卒業
- 1973年 東北大学大学院文学研究科博士課程満期退学
- 1973年 三重大学教育学部 教員
- 1983年 三重大学人文学部 移籍
- 1988年 三重大学人文学部 教授
- 2000年 東北学院大学教養学部 教授

私の大学院の処女論文は『社会学研究』（1972）に掲載された「社会学における心理学的説明の提唱とその意義」である。タルコット・パーソンズ、ロバート・マートンと並んで、60年代のアメリカの社会学界を風靡していたジョージ・ホーマンズの社会学理論を解説しその意義を述べたものであった。それはリライトされて『社会学評論』（1973）に掲載された「ホーマンズ社会学理論の準拠枠」となった。

ホーマンズは、パーソンズの行為の準拠枠、カテゴリーの概念図式に反発し、ヘンペル、ネ

ーゲルの科学哲学者の説明理論（カバーリング法則による説明の論理）を社会学に導入した学者である。彼によれば、社会学の経験命題を演繹的に説明する普遍命題は、社会学命題（社会水準、集団水準の命題）でなく、個人の行動命題である。社会学の普遍命題は存在せず、それは個人行動命題である。彼自身はスキナーの強化学習理論を普遍命題として、種々の社会学の経験命題（小集団次元）をこの命題から演繹的に説明してみせている。このことから、彼は社会学理論を心理学理論に還元するものだととして、社会学者から反発を買うのである。

ホーマンズのこの普遍命題には、報酬、コストの概念と行動強化の原理を経済学の原理と結びつけたところがあるため、この考え方を継承発展させたピーター・ブラウと併せて社会的交換理論として呼ばれることになったが、ホーマンズ自身は交換理論家と呼ばれるよりも、行動主義社会学者と呼ばれることを好んだ。

社会学を、分類カテゴリー、概念図式の小学校の教科書レベルから、命題の演繹、演繹的説明の理論を持つ高校の教科書レベルに引き上げるべく、その手続きを説いたのがハンス・ゼッターバーグの『社会学の理論と証明（邦題 社会学的思考法）』であるが、その考えを实践した優等生がホーマンズの『社会行動論』（1961）である。

1973年に、大学院を満期退学し、三重大学に就職してまもなく、ドイツのフンメルとオブの『社会学の心理学への還元』（1968,1971）に出会った。彼らは科学哲学、論理学に精通し、ホー

マンズより厳密に、還元的演繹をおこなっている。それをむさぼるように読んだ。1984年、1988年にこれまでの研究成果をまとめた『交換理論と社会学の方法』『現代の交換理論』を上梓した。

文科省派遣による在外研究の機会を得た1988年に、オランダ・ユトレヒト大学に滞在し、大学院の入門ゼミに出席した。そこは、フローニンゲン大学と合同でオランダのICS（社会科学の理論と方法論の連合大学院）を構成していた。彼らは社会学命題（マクロ社会水準の独立変数と同従属変数）を個人行動命題（ミクロ水準の独立変数と同従属変数）から演繹するのに、マクロ社会水準の独立変数 - ミクロ水準の独立変数のリンク、ミクロ水準の従属変数 - マクロ社会水準の従属変数のリンクという、異なる水準の変数のリンクの問題に取り組む。前者を架橋の問題、後者を変換（ないしは集計）の問題と呼ぶ。彼らはフランスのレイモン・ブードン『社会的行為の論理』（1979,1981）にヒントを得ている。ブードンの定式は次のものである。

Mは被説明項である。個人主義的パラダイムでは、説明するとは、それを一組の行為 m の帰結とすることを意味する。 $M = M(m)$ Mは行為 m の関数である。

行為 m は、行為者の状況(S)と関係づけることによって理解される。 $m = m(S)$

状況(S)は、何らかのマクロな変数(P)の帰結として説明されねばならない。 $S = S(P)$

全体をまとめると $M = M(m [S(P)])$

このマクロ - ミクロ - マクロ・リンクの考え方は、コールマンの逆台形（ユニットバス型、ボート型図式）で馴染みのものであるが、コールマンは直接的には、オランダ学派からヒントを得ているが、ブードンとつながりを確認できる。

$M = M(m)$ はコールマンのタイプ3の関係

$m = m(S)$ はコールマンのタイプ1の関係

$S = S(P)$ はコールマンのタイプ2の関係

被説明項は、マクロ水準の変数間の因果関係を述べる命題、ミクロ水準の変数間の因果関係を述べる命題だけでなく、それぞれの水準の相関関係を述べる命題でも由とされる。初期リンデンバークやブードン、オブでは、カバーリング法則による説明（ヘンペル・オッペンハイム型説明）形態を採っていたが、後期リンデンバークやエサーでは、コールマンの逆台形（ユニットバス型、ボート型図式）をとるようになる。

オランダ・ユトレヒト訪問は、私を合理的選択理論に接近させた。合理的選択理論はモデル・アプローチである。私自身が、合理的選択理論の立場に立って書いた最初の論文は、「集合的行為への個人主義アプローチ」（1985）であるが、「秩序問題への個人主義アプローチ」（1990,1991）「Peter Abell(ed.)Rational Choice Theory」書評(1992)のあたりから本格的になる。「交換理論から合理的選択理論へ」（1997）は、わたしが交換理論と訣別し、合理的選択理論の採択を宣言したかに受け取られるが、その論文は交換理論の合理的選択理論分枝の研究動向のサーベイであり、交換理論が合理的選択理論分枝と交換ネットワーク理論分枝に分岐したことを語ったものである。そこでは、コールマンの『社会理論の基礎』の内容とその反響が主として取り上げられている。

実はそのころすでにこの著書の翻訳を進めていたのである。この著書は、アメリカではヘクター、ベッカーの著書とならんで合理的選択理論社会学のバイブルと目されていた。この著書は、青木書店の社会学の思想シリーズの第4巻をなすもので、2000年の学院大学への移籍の記

念に出版を目論んだが、提出した訳文に編集側から疑義が多数出され、8名の協力者を得て再度訳し直し、ようやく2004年に上巻、2006年に下巻を刊行することができた。翻訳の過程で参考に資するために、かれがこの著書について語ったこと、彼の著書に再録される原論文、この著作に対する多数の書評などを読みあさった。その一部は、『教養学部論集』、『人間情報学研究』に掲載させて頂いた。

交換理論、合理的選択理論の日本社会分析への適用は、「日常生活における交換」（『現代の交換理論』第3章 1988年）「普遍的説明と文化的説明」（『世界のなかの日本型システム』1998年）「日本社会の秩序の高さの説明と秩序維持のための処方箋の検討」（『フォーマライゼーションによる社会学的伝統の展開と現代社会の解明』2005年）で試みた。2番目のものは、国際日本文化研究センターの共同研究員（濱口 班）としての成果であり、3番目のものは、九州大学大学院三隅一人氏をキャップとする科学研究費助成研究の成果である。後者の研究活動で、2001年にドイツ ライプチヒ大学で開かれた日独社会学者の国際集会、2005年にオランダ フローニンゲン大学で開かれた日蘭独社会学者の国際集会に参加したことが良き思い出である。

10年にわたって取り組んできた翻訳が片づいて、虚脱状態に陥ったが、訳書の日本での反響が芳しくないので、日本社会学会大会、数理社会学会大会でこの著書をめぐるテーマセッション、パネル・ディスカッションを開催し、日本の社会学者の関心を惹くことに奔走しているこの頃である。

※ この文章は、2008年3月刊行の『人間情報学研究 第13巻』に掲載された記事を元にしております。その後、略歴や所属等に変更がある場合がございます。